

# 荻野恭茂氏蔵 『伊勢物語』

— 翻 刻 (下) ・ 考 察 —

西 純 子

これは、相山国文学第七号の「荻野恭茂氏所蔵『伊勢物語』翻刻(上)」に続き、八八段以降を翻刻したものである。翻刻の記載形態等は、前号の凡例に従うので参照いただきたい。なお、翻刻を終えた後に若干の考察を記した。

88 む\ かしいとわかき(有七)にはあらぬこれかれともたち

ともあつまりて月を見てそれかなかにひとり

おほかたは月をもめてしこれその

つもれば人のおいとなるもの

89 む\ かしいやし(三)からぬおとこわれよりはまさ

りたる人を思ひかけてとしへにける

人しれすわれこひしなはあちきなく

90 む\ いたれの神になき名おほせむ

あはれとや思ひけむ(五)さらはあすものこしにても

といへりけるをかきりなくうれしく又うたかは

しかりければおもしろかりけるさくらにつけて(55オ)

さくら花けふこそかくもにほふらめ

あなたのみかたあすのよのこと

といふ心はへもあるへし

91 む\ かし月日のゆくをさへなけくおとこ三月

つこもりかたに

おしめとも春のかきりのけふの日の

ゆふくれにさへなりにけるかな

92 むかしこひしさにきつゝかへれとも女にせう

(55ウ)

そこをたにえせてよめる

あしへこくたなゝしをふねいくそたひ

ゆきかへるらむしる人もなみ

93 むかしおとこ身はいやしくていとになき人を

思ひかたりけりすこしたのみぬへきさまにや

ありけむふしておもひおきておもひわひてよ

める

あふな／＼おもひはずへしなそへなく

たかきいやしきくるしかりけり

むかしもかゝることは世のことよりはりにやありけむ

(56オ)

94 昔おとこ有けりいかにありけむそのおとこすまず

なりにけりのちにおとこありけれとこある中な

りければこまかにこそあらねと時々ものいひ

をこせけり女かたにゑかく人なりければかきに

やれりけるをいまのおとこのものすとてひと日ふ

つかをこせざりければかのおとこいとつらくをの

かきこゆることをはいまゝてたまはねはことよりはと

おもへとなを人はうらみつへき物になむあり

けるとてろうしてよみてやれりける時は秋に

なむありける

(56ウ)

秋の夜は春日わするゝものなれや

かすみにきりやちへまざるらむ

となむよめりける女返し

ち々の秋ひとつのはるにむかはめや

もみちも花もともにこそちれ

95 昔二条の后につかうまつるおとこありけり女

のつかうまつるをつねに見かはしてよはひわ

たりけりいかてもこのしにたいめむしておほつ

なく思ひつめたることすこしはるかきむといひ

ければをむないとしのひてもこのしにあひに

(57オ)

けり物かたりなとしておとこ

ひこほしにこひはまさりぬあまの河

へたつるせきをいまはやめてよ

このうたにめてゝあひにけり

96 昔男ありけり女をとかくいふこと月日へに

けりいは木にしあらねは心くるしとや思ひ

けむやう／＼あはれと思ひけりそのころみな月

のちはかりなりければ女身にかさひとつふたつ

いてきにけり女いひをこせたる今はなにの心も

なし身にかさもひとつふたついたり時もいと

(57ウ)

あつしすこし秋風ふきたちなむときかなら

すあはむといへりけり秋マキたつころをひにこゝ

かしこよりその人のもとへいなむすなりとてく

せちいてきにけりさりければこの女のせうとは

かにむかへにきたりされはこの女かえてのはつ

もみちをひろはせてうたをよみてかきつけてを

こせたり

秋かけていひしなからもあらなくに

このはふりしくえにこそありけれ

(58オ)

とていぬさてやかてのちつゐにけふまでしらすよ

くてやあらむあしくてやあらむいにし所もしらす

かのおとこはあまのさかてをうちてなむのろひをる

なるむくつけきこと人のろひことはおふ物に

やあらむおはぬ物にやあらむいまこそはみめとそ

いふなる

97 むかしほりかはおほいまうちきみと申いまそ

かりける四十(真四三)の賀九条の家にてせられける日

中将なりけるおきな

さくらはなちりかひくもれおいらくの

(58ウ)

こむといふなるみちまかふかに

98 忠仁公天安元政清和外祖三年二月十九日大政大臣五十五四月九日従一位三年十一月既

むかしおほきおととおほいまうちきみときこ

ゆるおはしけりつかうまつるおとこなか月はかり

にむめをつくりえたにきしをつけてたて

まつるとて

わかたのむきみかためにとおる花は

時しもわかぬものにそありける

とよみてたてまつりたりければいとかしこくおかし

かり給ひてつかひにろくたまはりけり

99 薬平貞観六年右少将七年右馬頭十九年正月左中将元慶三藏人頭

むかし右近の馬場の(案内)ひをりのひむかひにたてた

りけるくるまに女のかほのしたすたれよりほのかに

見えければ中将なりけるおとこのよみてやり

ける

見すもあらずみもせぬ人のこひしくは

あやなくけふやなかめくらさむ

返し  
しるしらぬなにかあやなくわきていはむ

おもひのみこそしるへなりけれ  
のちはたれとしりにけり

100 昔男後涼殿のはさまをわたりければあるや

(59ウ)

むことなき人の御つほねよりわすれくさを  
しのふくさとやいふとていたさせたまへりけ  
れはたまはりて

わすれ草おふる野へとは見るらめと

こはしのふなりのちもたのまむ

行平貞観十二年二月参議五十三左兵衛督十四年左衛門督十五年従三位大宰帥  
元慶元年治部卿六年正月中納言六十五年正三位民部卿仁和元按察

101 むかし左兵衛督なりけるありはらのゆきひら

といふありけりその人の家によきさけありと

きゝてうへにありける藤原近良貞観十二年右中弁十六年中弁はらのまさちか

といふをなむまらうとさねにてその日はあるし

(60オ)

まうけしたりけるなさけある人にてかめに花

をさせりその花のなかにあやしきふちのはな有

けり花のしなひ三尺六寸はかりなむ有けるそれ

をたいにてよむよみはてかたにあるしのはら

からなるあるしゝたまふときゝてきたりけ

れはとらへてよませけるもとよりうたのことはしら

さりければすまひけれとしるてよませければ

かくなむ

さく花のしたにかくるゝ人をおほみ

ありしにまさるふちのかけかも

(60ウ)

なとかくしもよむといひければおほきおとゝのゑ  
い花のさかりにみまそかりて藤氏のこと  
さかゆるを思ひてよめるとなむいひけるみな  
人そしらすなりにけり

102 むかしおとこ有けりうたはよまさりけれと世

の中を思ひしりたりけりあてなる女のあまに(念)

なりて世中を思ひうんして京にもあらずはる

かなる山ざとにすみけりもとしそくなりけれ

はよみてやりける

そむくとてくもにはのらぬものなれと

(61オ)

よのうきことそよそになるてふ

いとなむいひやりける露管のみやなり

103 むかしおとこありけりいとまめにしちようにて

あたなる心なかりけりふかくさのみかとなむ(七)

つかうまつりけるころあやまりやしたりけむ(光)

こたちのつかひたまひける人をあひいへり

けりさて

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめは  
いやはかなにもなりまさるかな  
となむよみてやりけるさるうたのきたな  
けさよ

(61ウ)

104 昔ことなる事なくてあまになれる人有けり  
かたちをやつしたれとも物やゆかしかりけむ  
かものまつり見にいてたりけるをおとこうた  
よみてやる

世をうみのあまとし人を見るからに

めくはせよともたのまるゝかな

これは齋宮の物見たまひけるくるまにかく

きこえたりければ見さしてかへりたまひ

にけりとなむ

105 昔男かくてはしぬへしといひやりたりければ

(62オ)

女

しら露はけなはけなゝむきえずとて

たまにぬくへき人もあらしを

といへりければいとなめしと思ひけれと心さし

はいやまさりけり

106 むかしおとこみこたちのせうえりし給所に

まうてゝたつた河のほとりにて

ちはやふる袖世もきかすたつた河

からくれなぬに水くゝるとは

107 昔あてなるおとこ有けりその男のもとなり

(62ウ)

ける人を内記にありけるふちはらのとしゆきと  
いふ人よはひけりされとまたわかければふみも  
おさゝしからすこと葉もいひしらすいはむや  
うたはよまさりければかのあるしなる人あんを  
かきてかゝせてやりけりめてまとひにけりさて  
おとこのよめる

つれゝのなかめにまさるなみた河

袖のみひちてあふよしもなし

返しれいのおとこ女にかはりて

あさみこそ袖はひつらめなみた川

(63オ)

身さへなかるるときかはたのまむ

といへりければおとこいといたりめてゝいまゝてまき

てふはこにいられてありとなむいふなるおとこふみ

をこせたりえてのちの事なりけりあめのふり

ぬへきになむ見わつらひ侍るみさいはひあらは

このあめはふらしといへりければれいのおとこ

女にかはりてよみてやらす

かすくにおもひおもはずとひかたみ

身をしるあめはふりそまされる

とよみてやれりければみのもかさもとりあへ

(63ウ)

てしとにぬれてまとひきにけり

108 むかし女(伊)ひとの心をうらみて

風ふけはとはに浪こすいはなれや

わか衣てのかはく時なき

とつねのことくきにいひけるをきおひけ

るおとこ

夜のことにかはつあまたなく田には

水こそまされ雨はふらねと

109 むかしおとこもたちの人をうしなへる

もとにやりける

(64オ)

花よりも人こそあたになりにけれ

いづれをさきにこむとか見し

110 昔おとこみそかにかよふ女(桑門)ありけりそれか

もとよりこよゆめになむ見えたまひつる

といへりければおとこ

おもひあまりいてにしたまのあるならむ

夜ふかく見えは玉むすひせよ

111 むかしおとこやむことなき女のもとになくなり

にけるをとふらふやうにていひやりける

いにしへは有もやしけむ今そしる

(64ウ)

また見ぬ人をこふるものとは

返し

したひものしるしとするもとけなくに

かたるかことはこひすあるへき

又返し

こひしとはさらにもいはししたひもの

とけむを人はそれとしらなむ

112 むかしおとこねむころにいひちぎれる女のこと

さまになりければ

すまのあまのしほやく煙風をいたみ

(65オ)

おもはぬかたにたなひきにけり

113 むかしおとこやもめにてゐて

なかゝらぬいのちのほとにわするゝは

いかにみしかき心なるらむ

114 むかし(光)仁和(仁三)のみか(光)とせり河に行かうし給ける

時いまはさることにけなくおもひけれともとつ

きにける事なれはおほたかのたかかひにてき  
ふらはせたまひけるすりかりきぬのたもとにか

仁和三年三月十四日行幸河

行平三年四月十三日教仕寛平五年第七十六

きつげゝる  
おきなざひ人なとかめそかりころも

(65ウ)

けふばかりとそたつもなくなる

おほやけの御氣しきあしかりけりをのか

よはひをおもひけれとわかゝらぬ人はきゝ

おひけりとや

115 むかしみちのくにゝておとこ女すみけりおとこ

みやこへいなむといふこの女かなしうてむまのはな

むけをたにせむとておきのゐて宮こしまと

いふところにてさけのませてよめる

おきのゐて身をやくよりもかなしきは

みやこしまへのわかれなりけり

(66オ)

116 昔男すゝろにみちのくにまてまといひにけり京

におもふ人にいひやる

浪まより見ゆるこしまのはまひさし

ひさしくなりぬきみにあひみて

なにもみなよくなりにけりとなむいひ

やりける

117 むかし(文)みか(天元正十)とすみよしに行幸し給ひけり

我見てもひさしくなりぬすみよしの

きしのひめ松いく世へぬらむ

おほむ(秘)神けきやうてし給て

(66ウ)

むつましと君はしら浪みつかきの

ひさしき世よりいはひそめてき

118 むかしおとこひさしくをともせてわするゝ

心(三)もなしまいりこむといへりければ

たまかつらはふ木あまたになりぬれば

たえぬ心(案内)のうれしけもなし

119 むかし(案内)女のあたなるおとこのかたみとてを

きたるものともを見て

かたみこそ今はあたなれこれなくは

わするゝ時もあらましものを

(67オ)

120 むかしおとこ女のまたよへすもおほえたるか

人の御(御)もとにしひのひてものきこえてのちほ

とへて

近江なるつくまのまつりとくせなむ

つれなき人のなへのかす見ん

121 むかしおとこ梅壺より雨にぬれて人の

まかりいつるをみて  
うくひすの花をぬふてふかさもかな  
ぬるめる人にきせてかへさむ  
返し

(67ウ)

鶯の花をぬふてふかさはいな

おもひをつげよほしてかへさむ

122 むかしおとこちきれる事あやまれる人に

山しろのゐてのたま水手にむすひ

たのみしかひもなき世なりけり

といひやれといらへもせず

123 むかしおとこありけり深草にすみける女

をやうくあきかたにやおもひけむかゝるう

たをよみける

年をへてすみこしさとをいてゝいなは

(68オ)

いとふかくさ野とやなりなん

女かへし

野とならほうつらとなりてなきをらむ

かりにたにやは君はこさらむ

とよめりけるにめてゝゆかむとおもふこゝろ

なくなりにけり

124 むかしおとこいかなりけることをおもひ  
けるおりにかよめる

思ふこといはてそたゝにやみぬへき

われとひとしき人しなけれは

(68ウ)

125 むかしおとこわつらひてこゝちしぬへく

おほえけれは

つゐにゆくみちとはかねてきゝしかと

昨日けふとはおもはさりしを

(69オ)

(69ウは白紙)

業平朝臣

三品彈正尹

阿保親王五男從三位乙叡女

母伊豆内親王

桓武第八皇女 母藤南子

年月日 任左近將監

承和十四年正月補藏人嘉祥二年正月七日從五位下貞

観四年正月七日從五位五年二月十日左兵衛權佐六年

三月八日右近少將七年三月九日右馬權頭十一年正月

七日正五位下十五年正月七日從四位下元慶元年正月

十五日左近權中將十一月廿一日從四位上三年正月七日

相模守三年十月藏人頭四年正月十一日美濃權守

同廿八日卒

(70オ)



親王 平城第三母正五位下蕃良藤繼女  
承和九年十月薨贈一品

行平卿 阿保親王一男

天長三年 仲平 行平 守平 業平 賜姓在原朝臣

承和七年正月藏人十二月辭退廿日從五位下廿四十年

二月侍從十三年正月從五上任左兵衛佐五月右近少將

仁壽三年正五下齋衡二年正月四位因幡守四年兵

部大輔天安二年二月中務大輔四月左馬頭三年正

月播磨守貞觀二年六月内匠頭八月廿六日左京大  
夫四年正月信乃守同月從四上五年二月大藏大輔六

(70ウ)

年正月十六日備前權守三月八日兼左兵衛督八年

四月正四位下十年五月兼備中守貞觀十二年二月

十三日參議五十三廿六日左兵衛督十四年八月廿一日藏

人頭左衛門督十五年十月十四日別當從三位太宰帥

元慶元年治部卿六年六月納言六十八八年正三位

民部卿仁和元年按察使仁和三年四月十三日致仕

寬平五年薨七十七

紀有常 承和十一年正月十一日右兵衛大尉嘉祥三年四月二日

左近將監四月藏人五月十七日兼近江權大丞仁壽

(71オ)

元年七月廿六日兼左馬助十一月甲子從五位下二年

二月廿六日兼但馬介三年正月十六日右兵衛佐四年

正月十六日兼讚岐介輔左兵衛二年正月從五位上

同十五日左近少將天安元年九月廿七日兼少納言

二年二月五日兼肥後權守貞觀七年三月九日任

刑部權大輔九年二月十一日任下野權守十五年正

月七日正五下十七年二月十七日任雅樂頭十八年正月七

日從四位下十九年正月廿三日卒六十三

二條后 中納言左衛門督贈太政大臣長良女母紀伊守繼女  
貞觀八年十二月女御宣旨九年正月八日正五位

貞觀十年十二月廿六日生第一皇子廿七帝御年十九

十一年二月立為皇太子十三年正月八日從三位元慶元

年正月三日即位日為中宮卅六六年正月七日為皇

太后宮寬平八月九月廿一日停后位延喜十年十二

月薨六十九天慶六年五月追復

后位 貞觀元年十一月廿日從五位下  
五節舞妓

河原左大臣融 嵯峨第十二源氏

承和五年十一月廿七日正四位下元服日六年閏正月乙酉

徒從八年正月相模守九年己亥近江守十五年二月

右近中將兼美作守嘉祥三年正月七日從三位五

(72オ)

月右衛門督仁壽四年八月兼伊勢守齊衡三年九月任參議右衛門督伊勢守如元

なそへなく

万葉集第十八

ほとゝぎす今夜こよなきわたれ灯を

つくよになそへそのかけをみむ  
月夜也 ならずらへ也

六帖歌

いへはえにふかくかなしきふえ竹の

よこゑやたれととふ人もなし

宋玉神女賦

モトヨリ 素質幹之醜ナル実兮志解泰ニシテテイ而体閑ミヤヒカタリ

曹子建洛神賦 みやひ みやひか也といふ詞

其心みやひをかはずなといふは

なざけといふおなしこゝろの事也

(73オ)

本云 天福二年正月廿日己未申刻凌桑門之盲目連日

風雪之中遂此書寫為授鐘愛之孫女也

同廿二日校之了

本云 以京極黃門自筆兩本校合卒

京極黃門伊勢物語兩本奥書

一本云

抑伊勢物語根源古人説、不同或云在原中將自

記云、因茲有其謙退比興之詞等又云伊勢筆作也

或云生年十三幼書之 似彼家集文体是故号伊勢物語以此兩説

案之更難決之心中秘密身上興言他人推而難

注之以之可謂其自書歟但疑万葉古風之中多

載撰集之歌仁和聖日之間粗記臨幸之儀此等

事又不審伊勢家集其端文体偏以同之是又

見先達旧記庶幾其体歟而不知之加之此物

語名字非彼筆作者何称伊勢乎

或説云為狩使下向伊勢仍有此名其説又難信始

則載南京春日之詞次又注西对夜月之思富

士山之雪武藏野之煙凡非伊勢国事多以為

此物語之肝心仍兩説共有不審古事只仰而

可信又或説後人以狩使事改為此草子之端

為叶伊勢物語之道理件本狼籍奇恠者也伊

行所為也不可不用之先年所書之本為人被借

(73ウ)

(74オ)

戸部尚書 判

(74ウ)

一本云

合多本所用捨也可備証本

近代以狩使事為端之本出来末代人今案也

更不可用之此物語古人之説不同或称在中將

之自書或称伊勢之筆作就彼此有書落事

等上古之人強不可尋其作者只可詁詞

花言葉而已

戸部尚書 判

(75オ)

翻刻(上)に二箇所誤りがありました。おわびして訂正いたします。

138	10	70		
			(拾遺三八)	(拾遺三八)
			ちはやふる	ちはやふる
			↓	
122	20	16		
			(誤)	(正)
			たのみきらぬらむ	たのみきぬらむ

### 考 察

この写本は一二五段、和歌二〇九首を持ち、その配列等からみても、奥書・勘物から見ても、定家本の系統に属することは疑いないが、その中でどのような特色を持つものであろうか。奥書・勘物は荻野恭茂氏が「架蔵本『伊勢物語』について」で紹介しておられるので、ここでは本文上の特色を考えてみたい。

定家本は、天福本・武田本・流布本の三つに分類されるが、この本はどの部類に属するであろうか。天福本本文に定家自筆本再建の第一の資料である学習院大図書館蔵伝定家本、武田本本文に山田清市氏が再建された定家自筆武田本本文、流布本本文に室町時代から江戸時代にかけて写本・版本の大半を占めた『闕疑抄』本文をあて、その三本と荻野本を比較(漢字仮名の相違は省略した)したのが次の表である。



36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18
81	81	78	74	69	69	65	65	65	64	62	58	54	52	52	47	46	45	43
47	47	45	43	40	40	38	37	37	36	34	32	31	30	30	29	28	28	26
ウ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	オ	オ	オ	ウ

いかしこくめくみつかう  
 ほたるたかうとひあかる  
 あさましくえたいめんせて  
 おもへとえこそ  
 かざりちまきを  
 かざりちまきを  
 ゆめちをたとる  
 ありければおとこ  
 われをはしるやとて  
 おとこ女みそかに  
 かたかたはにしつゝ  
 いとかなしきこと  
 このおとこは人のくにより  
 女もはたいとあはしとも  
 女のねやもちかく  
 山はへたてねと  
 かの大將いてゝ  
 いたしきのしたに  
 となむよみける

○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

う  
 く  
 ナシ  
 かざなり  
 を  
 たのむ  
 このおとこ  
 らす  
 ナシ  
 いとゝ  
 ナシ  
 はた  
 ナシ  
 にあらねとも  
 たいしき  
 けるは

○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

ける。 たいしき天福  
 いたしき 天福  
 こ だいしき天福  
 はへだてねと 天福  
 はた。 天福  
 女みそかに 天福  
 いた。 天福  
 らす 天福  
 このおとこ 天福  
 たのむ 天福  
 を。 天福  
 かざり 天福  
 に。 天福  
 え。 天福  
 く。 天福  
 ナシ 天福



7	6	5	4	3	2	1	通番章段丁数	荻野本	武田本	天福本	闕疑抄	『伊勢物語校本と研究』 諸本との比較 <sup>(注4)</sup>	『伊勢物語に就きての研究』 諸本との比較 <sup>(注5)</sup>
19	15	12	10	9	6	6	4ウ 神なりさはきに		る	る	る	武田(孝・永・川・陵・宗・明)・建仁(明)・根三(良)・根六(岡)	天福(東)・武田(尊)・流布(千・七・飛・山・明)・奈(片)・古本(肖・時)
13ウ	11オ	9ウ	8ウ	6ウ	5ウ	4ウ	おはしけるとときとかや	かきつはたといふもしを	や	や	や	武田(正)	天福(東)
							むざしの国いるまのこほり	いつもし	ナシ	ナシ	ナシ	建仁(根二(氏・家)・根二(明・醒))	天福(東)
							この野はぬす人あんなり	あなり	あなり	あなり	あなり	根二(家)	天福(東)
							心を見てはいかゝせんは	いかゝは	いかゝは	いかゝは	いかゝは	武田(刈)	天福(東)
							思ひたえずをんな	承久	承久	承久	承久	武田(重)	天福(東)

この表の◎印は荻野本と同じ本文を持つことを表わすが、これを見ると、一段〜二七段は天福本、四〇段〜一〇七段は武田本への偏りがみられ、一二五段を通してこの本が一つの系統に属しているとはいえない。また、三本と異なる本文を持つ箇所も数多く見られる。それらを ①『伊勢物語に就きての研究(校本編)』・

①一二五段本と同じ本文を持つもの  
『伊勢物語校本と研究』に収載されている一二五段假名本のいづれかと同じ本文を持つもの、②一二五段本以外の假名本と同じ本文を持つもの、③(①②)のどちらとも異なる本文を持つもの、に分けて表わすと次のようになる。

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8
58	51	47	40	39	39	38	37	33	32	31	31	31	31	23
32 ウ あれ た る や と の う れ た き は	30 ウ 花 こ そ あ ら め ね さ へ か れ め や ち	28 ウ つ れ な さ の ま さ り つ	25 オ 又 の 日 い ぬ の 時 は か り に	24 オ か き り な る へ き と も し け ち	23 ウ こ れ も こ の 見 る に	23 オ 紀 の 有 つ ね か り に い き た る に	22 ウ し た ひ も と く る	21 ウ い き て は 又 こ し と	21 ウ お も は す あ り け む	21 オ さ か み ん と い ふ を お と こ	21 オ よ し や 草 は に	21 オ ま へ を わ た る に	21 オ 御 つ ほ ね の ま へ を	17 オ は ち か は し て あ り け れ は
は	ち	の み	日 の	み	も	ナ シ	な	又 は	や お も は す	ナ シ	の	り け る	ナ シ	と
は	ち	の み	日 の	み	も	ナ シ	な	又 は	や お も は す	ナ シ	よ	り け る	ナ シ	と
は	ち	の み	日 の	み	も	ナ シ	な	又 は	や お も は す	ナ シ	の <small>よ 美 福</small>	り け る	ナ シ	ど
〔に 武田(遠)〕	武田(明)・根三(鉄)	〔のみ(朱) 武田(永)〕 武田(陵)	〔日(朱) 武田(永)〕 武田(明)	〔日(朱) 武田(永)〕	〔こ 武田(永)〕	建仁	〔る(な) 建仁〕	〔は(朱) 武田(永)〕 根(三)(明)	〔を 武田(永)〕	〔に(上朱)・武田(永)〕 〔に) 建仁〕	〔に(上朱)・武田(永)〕 〔を 武田(永)〕	武田(永)	武田(永)	根四(順)
	流布(片)			古本(慈)	〔こ 武田(尊)〕	古本(肖・時)		武田(高)	古本(最)	〔に(の) 古本(為)〕	〔に(の) 古本(為)〕	武田(尊)	〔みつほね 古本(相)〕	流布(飛)



33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
79	78	69	69	69	69	69	65	65	63	62
46 ウ ち ひ ろ あ る か け を	45 ウ ま う け さ せ 給 ふ	42 オ あ ふ さ か の せ き も	40 ウ う ら み つ ま て	40 ウ と こ ろ に ゐ て い り ぬ	40 ウ お と こ う れ し く て	40 オ い と ね む こ ろ に い た は り	39 オ 五 条 の き さ ぎ と も 申	36 ウ い ま す か り け り	36 ウ け ち め み ぬ 心 な ん あ り け る	34 ウ い に し へ の に ほ ひ や い つ ら
かけを	せさせ	は	し	て	し く て	は り け り	ナシ	る	せぬ	は
影を	せさせ	は	し	て	し く て	は り け り	ナシ	る	せぬ	は
かげを	せさせ	は	し	て	し く て	は り け り	ナシ	る	せぬ	は
〔か〕 〔た〕 けを〔又定かけを〕根五	〔せ〕 〔鉄〕 武田〔孝〕 ・根三	〔も〕〔は〕 朱 武田〔永〕	〔ぬ〕〔て〕 朱 武田〔永〕 〔ぬ〕 〔て〕 根二〔氏〕	武田〔宗〕	武田〔宗〕	〔は〕 り け り 〔朱〕 武田〔永〕	武田〔孝〕 ・川〔宗〕 ・根六〔宮〕 ・承久	根六〔天〕 ・岡	〔せ〕〔朱〕 ぬ 武田〔永〕	〔や〕〔は〕 武田〔永〕
	古本〔良〕 ・肖〔時〕	流布〔豊〕 ・古本〔最〕	〔ぬ〕〔て〕 古本〔為〕	武田〔尊〕		〔申す〕 流布〔一〕	古本〔為〕 ・承			

46	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34
123	112	109	104	98	97	94	93	89	86	82	82
68 ウ君はこさらむ	65 オことさまになりければ	64 オうしなへるもとに	62 オやつしたれとも	59 オつかひにろくたまはりけり	58 ウ申いまそかりける	57 オちへまざるらむ	56 オおきておもひわひて	55 オ思ひかけてとしへにける	52 ウわかき男女を	49 オみこのたまひける	48 オさけをのみつゝ
は	れは	かもとに	と	へ	り	ちへ	て	へける	わかき女	のゝ	のみ
は	れは	かもとに	と	へ	り	ちへ	て	へける	わかき女	のゝ	のみ
は	れは	がもとに	ど	へ	り	ちへ	て	ける	わかき女	のゝ	のみ
(か) 武田(陵)・建仁・根二 (順) 根五・根六(天) (か) 武田(幽)	根六(岡)・承久	武田(刈)	建仁・根二(醍)	承久	(たち) 根四(兼) (たち) 根五	武田(孝)・建仁・根二(氏)・根三(時) (鉄) 根四(順)	武田(永)・宗・建仁・根二(氏)・根三(明)・醍・根四(兼)・承久	武田(永)・陵・宗・明)・根六(宮)	武田(明)	(のみ) 朱つゝ 武田(永)	武田(正)・川(宗)・建仁・根二(家)・根三(明)・根三(侍)・根六(立)
(か) 武田(岩)・流布(七)・明・豊・古本(肖)・最	古本(承)	古本(茲)	武田(高)・古本(栄)	流布(明)・古本(承)	流布(千)・古本(為)・良・栄	流布(千)・七)・古本(相)・良	流布(飛)・山・明・奈	古本(肖)	武田(尊)・流布(片)・古本(肖)・最	武田(東)・武田(尊)・古本(肖)	

6	5	4	3	2	1	通番章段 丁数	荻野本	武田本	天福本	闕疑抄	『伊勢物語校本と研究』 諸本との比較	『伊勢物語に就きての研究』 諸本との比較
40	39	31	24	16	9	7オ	御もにふみかきてつく	にとて	にとて	にとて	「い」の本なし	「い」の本なし
25オ	23ウ	21オ	18ウ	12ウ	7オ	なみたのふるそありける	にそ	にそ	にそ			
						この男きたり	りけり	りけり	りけり	りけり		
						おなをあたにしか思ひけん	か	か	か	か		
						いてたてまいらす	つ	つ	つ	つ		
						オからうしていきでたりける	いて	いて	いて	いて		

③ 荻野本の特異本文

5	4	3	2	1	通番章段 丁数	荻野本	武田本	天福本	闕疑抄	『伊勢物語校本と研究』 諸本との比較	『伊勢物語に就きての研究』 諸本との比較
103	94	82	50	31	31	おなをあたにしか思ひけん	の	の	の	阿波文庫本 源通具本・顕昭本 阿波文庫本	大(神)・塗(不・群・丹) 〔きゝてむ 大(神)〕 大(大) 大(大) 大(神) 大(大)
61ウ	56ウ	48ウ	30オ	21オ	31	ことを <small>きくらん</small>	きくらむ	きくらむ	きくらむ		
						さくらことに <small>きくらん</small> おもしろく	し	し	し		
						ウをこせさりければ	り	り	り		
						ウころあやまりやしたりけむ	心	心	心	〔ころ 顕昭本〕	

② 一二五段本以外の諸本と同じ本文を持つもの

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
117	98	92	85	85	84	78	65	65	61	46	43	42
66 ウ け き や う て し 給 て	59 オ お ほ き お と と お ほ い ま う ち き み	55 ウ き つ と か へ れ と も	52 ウ 御 そ ぬ ぎ て た て ま つ り け り	52 オ む か し つ か う ま つ り 人	51 オ か な し う し た ま ひ け る	46 ウ い は に そ か ふ る	38 オ な か し つ か は し て そ れ は	37 オ か た か た は に し つ	34 オ 名 に し お	28 ウ お も ひ わ ひ て な む 菊 侍	26 ウ 又 一 人 き つ つ け て	26 オ な を は た て あ ら ざ り け る
し	おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと	と	たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり	まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし	り	か	け	く	しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし	ナシ	ナシ	え
し	おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと	と	たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり	まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし	り	か	け	く	しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし	ナシ	ナシ	え
し	おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと おほきおとと	と	たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり たまへり	まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし まつりし	り	か	け	く	しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし しおはし	ナシ	ナシ	え
<p>「お」の本なし</p>												
<p>「お」の本なし</p>												

③の表の中には明らかに誤りとわかるものも含まれるが、今まで比較してきた諸本とは別の本からの書写と思われる箇所(5・13など)もある。

また、異本傍書・並列が次の一四箇所に見られる。  
 14段 くりはらのあれはの松  
 16段 人からは心うつくしく

39段 いてたてまいらすついで  
39段 これもこの見るにもい  
50段 ことをきくらんきくらん  
58段 あれたるやとのうれたきはは  
62段 いにしへのにほひやいつらは  
62段 年月ふれとまさりかほなみき  
78段 いはにそかふるお  
79段 ちひろあるかけをたい  
94段 ちへまさるらむ立  
96段 秋たつころをひにまい  
102段 イとなむいひやりけるま  
123段 君はこさらむか

荻野本の本文は、武田本系本文を持つもの・天福本系本文を持つもの・流布本系本文を持つもの・一二五段本以外の本文を持つもの・荻野本独自の本文を持つものと様々であり、一四例の同筆の傍書・並列から見ても、いくつかの本の校合によりつくられたことがわかる。そして、その校合はよりよい本文をつくるためになされたことである。たとえば、「一〇段に「むさしの国ほいるまのこほり」のような古い形が見られるが、

これは武田本・天福本を持つ「いるまのこほり」より丁寧でわかりやすいという写者の判断により古い形の方をとって本文にしたのである。

伊勢物語は、室町時代になると二条・冷泉両家に伝来した天福本・武田本が絶大な勢力を持った。しかしその他の写本も数多く流布されており、それらの原本と、当時、良本とされていた天福本・武田本とを校合して書写することも多く行われた。この本の本文もそのような書写態度によってできたものなのである。

## 結 び

伊勢物語は平安時代以来、人々に広く親しまれてきたため、数多くの写本、版本が残されている。今回、荻野恭茂氏の御厚意により、氏が昭和四〇年に名古屋の古書肆・藤園堂書店より購入された写本の翻刻をさせていただいたが、この本は、古い形の原本と武田本天福本とを校合してできた、いろいろな系統の本文を持つもので、また、特異本文も多く見られる、とても興味深い本であった。

注

- 1 『松村博司先生古稀記念 国語国文学論集』笠間書院、所収。
- 2 『伊勢物語の研究(資料編)』片桐洋一著 明治書院に翻刻されているものを用いた。
- 3 山田清市氏はこれらすべてを定家本とされているが、それについては学者により意見の分かれるところであり、ここでは考えない。
- 4 山田清市著 桜楓社。諸本の略号、補入、見せけち等の記入方法はこの本に従う。
- 5 池田亀鑑著 有精堂出版。諸本の略号、補入、見せけち等の記入方法はこの本に従う。
- 6 片桐洋一氏の説。『伊勢物語の研究(研究編)』明治書院 四五〇頁。